

繪本通俗排悶錄

前篇

七

登
淺

遠

1.192

7



告白

此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊の余白あり
 或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し
 其の甚しきに至りて挿圖を彩りて却之を澆きのみふらば
 塗抹して以て其の何れを解き能ざるも至る者あり
 何を其れ思ひて其甚き乎夫れ此書籍ハ我が貸し
 以て業とふ所のものなり故之を澆がさるるも於て頗る
 營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於て之れハ償金を
 要せざる可らば仍て豫しめ此ハ告白し置と云爾

新稿 長門屋主人識

ども明公眼力あり。僕を乞食の中よりえり。其上兩度まぐ衣服を賜
 へるる誠ハ大恩也。僕彼淮陰の少年也。
 此一飯の恩を忘るるあたると云々。孝廉座と起く其心を
 握り。曰。吳生ハ誠ハ海内の豪傑也。我唯酒友なりと云ひ。足下を乞
 へるると稱美し。寺僧と雇ひ。梨花春と云酒と石買取。兩人日夜酒
 盛り。數月過く路費を與へ。故郷へ歸らせり。此六奇と云ハ先祖ハ朝
 列國ハ居く昔觀察甘の官なり。吳道夫ハ後胤あり。畧持書ハ通
 せん。甚博奕を好し。故遂ハ家を失ひ。郵卒と成り。久く居る。故
 山川の險阻路徑の遠近皆精し。塔トをわ。其後清の帥次第ハ攻
 來り。遂ハ大畧天下と定め。時廣列ハ攻來り。廣列の者共昏山



黄中秋の銀
 を得て其の
 人を待て封
 乃儘還一
 あり



華本補像

谷の間の道匿と二人も捕つた。郷導をたてた者あり。時六奇獨
 徐の歩來まると。羅兵執つて本陣へ送る。六奇大將の見く貝の
 の地理を説た。扱えける。僕と兄弟の約をる。者三十人。皆雄武
 あり。天下の明主をたれ依と。各軍勢を集め。所々一揆と成て。わ
 今明主天下を定め。官軍南へ下る。誠の萬民獲生を得。豪傑功
 をするの時至る。願ふ僕に徹。三十通を假。王彼兄弟共と喻。七
 味方はせいん。左あり。近死者を馳。泰も遠死者へ。靡死從ひ。城の破竹
 の勢あり。一月の間。此國皆平均仕らんと。大將其言。所の如く。せ
 久。暫時の粵の國。悉平均。此後六奇の數。言の堅陣強敵を。伐破て
 勇名を揚げ。奇策妙計を運。大功を立。閩國を征。蜀國を

討し。時にも。度々奇功を立。數年の間。通省水陸提督。諸所の水
 官の位。至ま。初六奇が流浪。巧人となり。時を生涯埋。木
 あり。と思定め。居る。一。查孝廉。又遇。衣服金銀を送。其上
 海内の豪傑あり。と見定め。天下の第一の知己を得。遂に
 心を勵。七奇功を立。匹夫と。興と大將軍。登る。康熙の初。二
 府を循。列州。用た。時牙將を遣。三千金を以。孝廉の家。贈。と
 別。書。并。幣。物。を。具。孝廉を。邀。孝廉即。粵。之。類。た。る。舟。并。舟
 輿等。其。外。の。調。渡。皆。美。麗。を。は。く。行。く。梅。嶺。更。嶺。の。名。所。を。越。ん
 と。六奇。子。息。の。吳。公。子。と。迎。大。孝。廉。を。尊。敬。を。夫。と。す。
 樓。船。の。乘。徒。に。蕭。樂。を。奏。し。晉。江。江。流。頃。南。下。る。時。吳

孝廉の事

六奇が轄下の文武の官属皆孝廉ふんえんと我もくと争ひて贈り物
 一ける程ふ錦綺珠玉山のてく積上るの循列の城下二十里の外やど六奇
 自身出迎へり前中を嚴重の道を拂ひ後中を千騎計も従ひ續え其行
 装諸侯王の天子の族の大名の既府に至る時孝廉と上坐ふ直に六
 奇首を地ふつて曰昔流浪せし時先生の遇せし一生乞入り朽果
 爲れと今日の栄花は皆先生の力也今先生幸か降臨し辱せ辱せ
 とく喜びく孝廉此地に居るより一年軍務何れと繁ヨリあるを查孝
 廉一言をせせ六奇皆敬ぶ其言の隨ふ故に諸人益孝廉を尊敬し贈
 物幾千万と云敷を著る也孝廉家の帰らんとする時六奇又三千金を
 与り曰此輕微の錢勿論先生の高恩萬分の二をも報せんとあはれども唯

聊淮陰の少年が徳を忘るるありうのと云く贈る也其後孝廉が
 の上ふ不意の大難出来ぬ其原の元年若中地の富人は廷鉞と云者明の
 困姓命朱相困の史概と云書を得て博く兵中の名士十八餘を精と増益
 修飾し御本とくける時を查孝廉名高き文人ありけり空竊ふ其名をも
 右の書参照考訂の連名の列め書加へるが其後此事朝廷へ改え凡其書
 六加つてる人の皆死罪ふ處せらるべし決せり
 六奇查孝廉實を知らざる由を詳め奏し辨じ此難を救ひたり兵
 孝廉益世ふ六とく酒と持て衆樂とくかの財宝とせり美地重
 女十二人を買て歌舞を教へ良夜のみ必廉を垂燈を張り舞歌せり情
 声花の容簾外に使れり觀る人心を奪はせり孝廉の夫人も音律を精

く建一け六。自拍板を打く。伎女共の音曲をある正室と為故小查氏
 の女樂亮元所細の中第一と稱せし。昔孝廉其の許み在り。時園林の
 景色色極くまごごたる中み大なる英石峰。百の形画計くその如く石英也
 一有る高き二丈許其見更なる言へん。孝廉大み賞美し。其
 名を縹雲とつ。其後十日計怪く。孝廉又園中み往々小彼石元へ成
 推しを向ふかの賞美し。其將軍がや。名大船のせ。孝廉
 の家小贈中遣ありけ。江を渡り山を越る其費用。又千緡。百の
 餘中へ。今の世と成と查孝廉が栄花も夢とる。歌舞の美人も皆
 年老く。林荒池の水も涸ぬ。英石峰もや。舊形見と。其儘のこま
 ども。

董継芳

鉅鹿地の大學生董継芳と云者。城京地の小樹村と云地に住む。其
 父仲璋。洞縣の人。吉夢川と云者。券を以て百金を借る。貧しく
 得む。其後打獵中璋も夢川も死。玄ぬ夢川が孫。恵迪也。中璋が券
 を借る。継芳が貧る。遂に催促もせ。継芳へり。借金
 をる。成知らば。券を拵る。催促せし。事を仕へ。恵迪が許
 む。往く家屋敷を以て。借金の代。與へんと云。恵迪承引せ。再三強
 く云け。恵迪もや。領。其後飢饉の時。恵迪彼家を外。賣る
 が百金。入る。値減り。継芳又其不足。程の金を入。借る。恵迪許
 む。持行くと。日君が。相。吾父と睦。り。百金を借。玉。先。其

償ふ券を乞ふる。家の値百金不足せりと賀故の山金中補入と云ひ
けし。惠迪堅く辨し。日彼家實を百金に當るとも。急の賣んとせし
故に少く下直らりし。君が與るるの非むと云ふ。あら又受む故に羅芳
も為方なり。近隣の人と雇ふ。惠迪へ様と云ひ。己事を得ず。其金
を受よ。縣令陳汝明此の成聞く。兩人の義を賞し。文を作す。此夏
を記さむと云ふ。

新安商

新安地の商人何某と云ふ者。萬曆年壬午の年。江西地へ買み行し。時九
江の過る舟舟の盜賊の。衣服調度を皆奪去す。船中より人七人あり
皆裸より悲居り。成此商人見付く衣食を與へ。後何方行人
を記さむと云ふ。

そと尋ねる。何とも秀才前より。都へ及第は往者ありと云。商人此を復て
夫々資資を贈り。皆泣を流し。喜まざる。翌年此中にて六人
進士。学校の役名。み登り。六人の中一人。方萬策と云入。數年過り。此萬
策。嘉湖地を分巡せし時。副使屠冲陽の家。酒宴を招き。其家僕
の中。先年難を救ひ。商人雜に居る。萬策遙に見付く。呼ばり。問
く。爾ハ新安の商人何某なりや。と云。然りと答ふ。江西地。往し。のわ
や。と問へ。のりと答ふ。八年以前江中。盗み遇し。秀才共を救ひし。の覺
わ。りや。と問ふ。此商人良久。漸く答ひ出。し。あ。る。の。わ。り。と。答。ふ。萬
策。此。を。復。と。齊。し。坐。を。立。商人の前。跪く。日。吾。が。恩。入。る。を。數。年。が。間。尋
ね。る。も。行。方。知。ま。ず。何。故。斯。と。成。玉。ひ。ぞ。と。尋。ね。る。を。答。ふ。日。追。て。損。失

打續死家産を被り故已む成得ざらん。此家小身を燬るると答ふ。
萬策直小暑冲陽の告く。此商を署中へ伴以帰す。叔同難の人々此由云
遣るる各厚く贈物をあり。萬策へ別小千金を贈り。此商人怒りて
富人とあり。故郷へ帰る名。

陸采候

呉門の陸采候と云者心爽めり。或時何某と云る商人
其家小来と細綴子等の品々を買取。已ぬ帰らんとしけるが折節九月
八日ありけり。陸采候此を留めり。曰明日重陽るを志。例の如く山小登り
と。酒をそ飲べ。此佳節をあり。舟路ぬか。王へん。無下あり。置
強く留めけり。商人も最こと同し。則其貨物共を外の宿所あり。置

翌日采候は飛く。治平寺と云山寺の上。終日醉を盡し。歸けり。其日
彼ら一置家失火。貨物も焼失ぬ。采候駭死る。高小
向く日。此貨舟へ積る前。我貨物も同し。況や君已ぬ昨日帰らんと云。成
吾強く留り。強く留り。此災ゆ。罹る。然も此貨と吾償。登
死る勿論。其値を残り。與へけり。商の甚感。喜と去る。陸
采候を弟と同居。居る。其後陸采候が鄰家より。火事出来ける。
陸氏が家を残り。残り。左右の家々皆焼失。程経。又前の如く。燒
る。陸氏が家へ今度も恙なく。残り。其時左鄰の高牆。陸氏の
方へ仆る。折し。采候兄弟。其下ぬ。わ。観る人。敬馬悲
く。兩人定。微塵あり。急ぎ堀出。此を。小。は。

つらう うちあつてくつらう ところ
牆の中うち自空うちある所ところありて。采候さいこう兄弟あに標々ひらひら坐まし居ゐる。兩人ふたり共とも傷やぶつるも。危あや難しを免まはるとある。

王福徴

トスル 名なの王福徴おうふくぢょうと云い者もの。諸生しよせいの時とき請待まをせる人の許もとへ往ゆんとする道みち
小溪川せきせがわあり。其その傍かたは白金はくごん一袋ひとふくろあり。開ひらかんとす。何なにぞ其その主ぬしへ
還かへさんと必かならずに往ゆんとする方かたへも行く。晩ま方かたは待居まちゐる。一ひと人にん遠とほくま
者ものあり。福徴ふくぢょう此人ここのありんと必かならずに汝なんぢ失なす物ものありと問とふ。此人ここの答こたへて曰い某たが債な
を取とり集ありて。銀ぎん百ひゃく七十しちじゅう兩りょうを得える。本もと心こころひりり。江えを過すり米こめを買かんと
必かならずに汝なんぢを渡わたす。此この溪水せきせいの水を渡わたす。襪わを脱ぬぎ其その時とき遺おぼしたる
あり。若し拾ひろひ者ものあり。半はんを贈たまはんと云いふ。福徴ふくぢょう其その銀ぎんの數かずを問とふ。皆みな

符合ふがひ一ひとけまが悉ことごとく還かへし與あへぬけり。此この人ひと半はんを分わけ贈たまはんと云い福徴ふくぢょう曰い
吾われの其その半はんを會あはする程ほどありと始はじめとて汝なんぢ又また還かへさんと疾持はやもちと歸かへる。いづく
今いま此この所ところに待居まちゐらん。とく受うけざるまが此この人ひと拜謝はいせしと云いぬ。長年ながねん福
徴ふくぢょうと名なの郷薦きょうせん。免狀めんじょうを領りやうし。萬曆まんりき乙未おつみの年とし進士しんしと
あり。追おひて立身たてみしと終つひに模倣もぼう列れつの太守たうしゆとあり。後職こうしやくを辭やしと家いへに歸かへる。長
壽じゆを得えて終つひにとあり。

旅次監生

京師きやうしの貧者ひんしや數人あまねり相議あひまり。銀十兩ぎんじゆりやうを貸かす資本しやぽんと。鴛鴦うんやうを燒やく。如何いか
賣うり。渡世わたせとせん。則すなはち傾銀店かやうぎんてんあり。鑿うけを借かす。其その銀ぎん割割わりわりと云いふ。如何いか
一ひとけん割勢わりせあり。其その重おもさ八錢はちせん目めをり。一塊ひとかた飛散ひさんと見え。方々たうたう尋たづねる。

共ふつふんえぞ。後ゆへ互ふ争裏ふ及び々せむせむせん方なく帰す。其日ふ至つて其者共又此所ふ集て争論し其家の樓上ふ旅宿せし監生。監生無學の入金をして秀才の類あり。彼等下下と来て其故を問ふ。衆あつぐの由を生口けし。監生曰吾昨夜樓門の檻のりて銀一鬼を得る。此汝等が失ひし銀るべし。と返し與へる。皆々大に喜ぶ。半を監生に贈らんと云。監生辞し曰吾銀を得んと欲り拾ふる。汝匿して言をくす。且爾等債來る。銀を吾何ぞ分ちらる。忍んや。とく受て。けし。衆あつて其恩は感て喜ぶ。歸りて何と云。此恩を報せん。と圖つ。其後此者共追て利を得て世を渡す。或時其邊へ小兒を鬻ん。伴ひする者あり。彼等此由をば付て則三百文ふ買ひて。相羨し。監生は

送す。僕めせん。と。直に旅宿へ伴ひ行つ。此小兒監生をえ。父と呼と泣む。且監生も涙を流し。喜ぶ。此兒ハ監生の子。八歳なり。三月をり前ふ張家湾と云ふ地あり。好人は勾引して失ひたり。監生又皆々銀を與へ。厚く謝し。歸りて

哈九

江南名の早西門の傍に回々園あり。其地を來り。哈九と云者あり。儼を賣を業と居る。ある時江浦地の者年貢の銀五十兩を携へ來て。忘置て去る。其跡少く。哈九此をん。急に追懸て其主を返す。此人喜ぶ。感て別とす。金を忘れり。人江浦名に至り。時大風あり。舟一艘覆して。今思ひ。今日忘て置る金を哈九が我に返り得せり。

滅不意の財を得つる。此金ゆく陰徳をあえと知り漁舟と呼て
 日一人を救ひ得るを。銀五両を與へると呼々魚舟共多く来て手々
 働けるを。只一人を救ひ得る。其姓名を尋ねんとり。哈九が
 子ゆく有るを。

黄中

順治の年比龍谿地の農夫黄中と云者其子小三と小舟に乗り漳
 列の東門に往き糞を買ひ父子別より擔ひて。其厠めく腰袂一
 を拾ひ得る。舟に持帰りて。開き視る。白銀六封あり。黄中曰此ハ必此
 厠へ入る者の忘るる。富貴の人ある。自身銀を腰に付け
 けり。貧乏人ある。此程の銀ゆく。命も係る。尋ね来る人を待居て返す

與へると云る。小三ハ父の言を。固き事と。様々争へども少くも
 聽入る。怒り成會み父又告ぐる。獨家に帰せし。叔黄中父一
 く待居。途向も周章と走り来る者あり。急ぎ厠へ入る。見廻し
 徘徊し。號泣す。黄中呼て其故を問ふ。答く曰。我父罪あり。山賊と
 ぬ吾父を指して。黨と云る。故に別守我父を獄へ入る。此頃ある貴人
 小堀と。此の哀歎を。舟へ彼貴人の扱ひを頼る。別守父を救へる。其
 謝禮として。銀百二十両を贈らんと約せり。そして。田宅を賣り。親友の
 助力を乞ふ。半を得る。先を贈りて。父を獄より出さる。後父力
 後父子力を竭す。其餘を捐入る。今日此銀を腰に付く。道を急ぐ。此
 此所ゆく。厠へ入る。銀の包を解く。用事を辨す。必厠を知る時。餘り



心慮^{こころ}く。かの銀^{ぎん}を其儘^{そのまゝ}忘^{わす}れ置^おぬ。道^{みち}ゆく其^{その}る^る成^{なり}心^{こころ}の如^{ごと}く。奔^はり還^{かへ}り尋^{たず}ね
 索^{もと}めども見えぬ。此^{この}銀^{ぎん}を失^うはれ父^{ちち}の死^しを救^{すく}ふ術^{わざ}を盡^{つく}す事^{こと}なく。涙^{なみだ}を流^{なが}し
 悟^{さと}りて其^{その}色^{いろ}と銀^{ぎん}の數^{かず}と成^{なり}具^ぐの尋^{たず}ねる^る事^{こと}皆^{みな}符合^{あは}れけり。其^{その}銀^{ぎん}
 あり。我^{われ}久^{ひさ}しく汝^{なつか}を待^{まち}居^ゐる事^{こと}なく。返^{かへ}り與^{あた}へる。其^{その}人^{ひと}驚^{おど}ろき喜^{よろこ}ぶ。一^{ひと}封^{ふう}を分^わち
 贈^{たま}へんと云^いふ。黄^{わう}中^{ちゆう}辞^じし。曰^{いは}く我^{われ}貪^{ねん}む公^{こう}の六^む封^{ふう}を還^{かへ}し。一^{ひと}封^{ふう}は受^うけんや汝^{なつか}
 速^{すみ}に行^いくべしと云^いふ。其^{その}人^{ひと}厚^{あつ}く謝^{あや}まると云^いふ。黄^{わう}中^{ちゆう}小^{せう}三^{さん}を待^{まち}居^ゐる事^{こと}なく。
 來^きたりけり。入^いり舟^{ふね}の棹^{さう}さうと歸^{かへ}り。中^{ちゆう}途^とゆく卒^{つひ}に風^{かぜ}雨^{あめ}起^おり。故^{ゆゑ}にわたり
 近^{ちか}に村^{むら}里^りへ舟^{ふね}を漕^こ寄^よせ。風^{かぜ}雨^{あめ}を凌^{しの}ぎ居^ゐる。彼^{かの}大^{だい}雨^うゆく川^か岸^{がし}より崩^{くづ}
 る。跡^{あと}の獲^とれし一^{ひと}ツツの黄^{わう}中^{ちゆう}此^{この}を見^みて米^{こめ}を儲^{たくわ}へる器^{うつわ}と云^いふ。其^{その}人^{ひと}舟^{ふね}へ取^とり
 入^いれんとせり。其^{その}獲^とれし錫^{しやく}めく口^{くち}を封^{ふう}し。中^{ちゆう}に何^{なに}物^{もの}も納^いめ置^おけり。其^{その}重^{おも}さう

舟^{ふね}中^{ちゆう}より舟^{ふね}へ取^とり乗^{のり}せり。其^{その}間^まに雨^{あめ}と風^{かぜ}静^{しず}まり。月^{つき}梢^{さか}に明^あかり。舟^{ふね}
 舟^{ふね}を漕^こせり。家^{いへ}の婦^め人^{にん}早^{はや}に夜^よ半^{はん}ぬ。家^{いへ}の小^{せう}三^{さん}今日^{けふ}の事^{こと}を
 母^{はは}に語^{かた}し。兩^{りゆう}人^{にん}皆^{みな}謂^いひ居^ゐる。居^ゐる。黄^{わう}中^{ちゆう}戸^{かど}を開^{ひら}き呼^よび共^{とも}に應^{こた}へし。母^{はは}
 曰^{いは}く汝^{なつか}曰^{いは}く。我^{われ}路^ちゆく室^{むろ}の獲^とれし。早^{はや}に内^{うち}へ取^とり入れし。云^いふ。母^{はは}
 子^こ共^{とも}に驚^{おど}ろき出^で來^きり。舟^{ふね}中^{ちゆう}をこえ。月^{つき}の光^{ひかり}ゆく。獲^とれし口^{くち}耀^{やう}きく雪^{ゆき}の如^{ごと}く。
 兩^{りゆう}人^{にん}喜^{よろこ}ぶ。舟^{ふね}より家^{いへ}の婦^め人^{にん}入^いり。錫^{しやく}を鑿^うちて去^さる。内^{うち}に皆^{みな}白^{しろ}銀^{ぎん}。大^{だい}抵^{たい}千^{せん}金^ご
 計^かりも有^あらんと見^みゆ。黄^{わう}中^{ちゆう}大^{だい}に驚^{おど}ろき。始^{はじめ}に偽^{いつはり}に言^いふ。信^{まこと}めありし。事^{こと}なく
 云^いふ。此^{この}鄰^{りん}家^がに唯^{ただ}一^{ひと}重^{かさ}の葦^{あし}牆^{かべ}を隔^へる。三^{さん}人^{にん}の言^{ことば}皆^{みな}洩^ある。其^{その}鄰^{りん}
 人^{にん}賞^{しょう}を得^えんと云^いふ。翌^{あした}日^ひ此^{この}由^{よし}を縣^{あま}令^らへ訴^うげし。即^{すなは}ち黄^{わう}中^{ちゆう}を執^とりて此^{この}を訊^{たず}なり。
 黄^{わう}中^{ちゆう}亦^{また}藏^{かく}る。昨日^{けふ}銀^{ぎん}を還^{かへ}り。事^{こと}なく。獲^とれし口^{くち}耀^{やう}きく雪^{ゆき}の如^{ごと}く。見^みゆ。言^{ことば}はけ

其縣令曰善。善を為者ハ必其報あり。其獲るる天下を汝ハ賜ひし物也。他人の知所あり。由るはる。旅館に宿りて。訴人を答。黄中を釋して。歸りける。黄中ハ城内の家を遷し。富人とありて。其を。

實發生傳

頃治の初。金華の戰破也。一時。實發生と云者。死骸共の間臥し居り。免を得ず。軍卒ハ妻を掠らる。其軍華亭。地。旅館のあり。取。路銀を使ひ盡し。旅館のあり。旅館の主人。其貌を視て。憐れ。何方へ往人。と尋る。生。主人曰。若文字會并を。生。主人云。若我家ハ留り。我を助け。徐ハ。妻の粧を尋。と云け。其。

甚と喜。則其家ハ居。主人の勞を助け。主人。家業。益。大ハ喜。此家ハ一人の女あり。生。其。或早朝。一人。此。其。又急。其跡ハ遺。物の。銀五十金。主人。其返。待居。午の刻。其人。又周章。汗を流。猪所を見廻。茫然。主居。生何故。此處ハ銀を遺。置。生。其數を問。符合。又。其。銀ハ何ハ用。答。日華亭の。中。掠置。婦女を賣。由を問。生。依。一人を買。妻とせん。と云。生。云。金ハ我。置。返。其。喜。并謝。一。數日。後。其。

人の許すも、使札をかきく。足下金を還あり、惠ふよき。事既み借へ。某
 の日婚するも。此婚ハ君の力也。其日ゆ々此館の主人と。足下とみ薄酒を進
 せん必来り玉へと云ふ。生固く辭し々也。主人曰我へ暇なるも。行難し。汝ら
 辭退すべく。云故生まるるち行へと約し。其便を返し名を已み其日
 成り往く見ける。家のさ有徳み見。未ハかむくも。つとへくも。さふ
 立や。門前の小川の邊を回歩し居ける。一葉の扁舟を漕来る。其中み
 麗服し。花やふ髪を束る婦人。面を掩く坐し居る。則新婦なる。岸
 近くも。時生あと彼婦人を視ま。紛る死故の妻なる。此時婦人
 も。生を視る。故の夫も。各駭く生ハ草の上み位。偃を。妻ハ舟の中み
 位伏し居る。扱門前み漕着ける時。婦人岸へ上ると云へ共。面をも掩く。

泣居し。惟く其故を問み。答く曰。只今一人の男子を視る。故の夫
 不善似る。故み悲死不堪。つと云ふ。そま如何様なる人ぞと云へ。
 其年、衣冠を具み答へる。生み紛るも。あや。此家の主人扱へと
 答ふ。急死生を尋求む。生ハ草の中み位臥し。死得ざる。何故ぞと
 問へ。答へず。強く問う。只今一人の婦人を見。と云う。涙み
 咽と。得む。其人曰。我已み明み知る。是婦人ハ足下の故の妻なり。前
 日足下我金を拾ひ得。其金ハ則君の金なる。足下義を重くと。此
 を吾み還る。吾其金ゆく。見婦を贖る。天よ。我み命と。足下夫婦
 をわ。せ。む。吾前日足下の金を返る。義み感む。故み今又見婦を
 足下み還る。と云。是共生ハ事。穂る。と。肯へ。其人則旅館主人

を頼と。此事を判せしむ主人云金を還せ者義士也然其共妻を以て
妻を失ふ本意あるを幸我の女を婦を還せる人の妻せんと云を
バ西人を初め商人を初めと同一く其詞に従ひ旅館主人の義心を感じ
けり。

あつと初め聞くと
少少の事あり告白
告白
告白
告白
告白

告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊の余白あれば
或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辞を書し
其の甚しきに至りて挿圖を彩りて却之を宛せしめ
塗抹して以て其の何れかを解き能いざるも至る者あり
何を其れ思はざる甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し
以て業とあり所のものなり故よ之を宛せしめふ於てハ頗る
營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於てハ之れハ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此ハ告白し置と云爾

新稿 長門屋主人識

